

【代表理事ご挨拶】



(一社) 地域国土強靱化研究所 (LRRI, 略称, エルリ) は, “先義後利” を社是として, 災害等に対して脆弱化する地域社会のレジリエンスを高めることによって地域社会の強靱化に貢献することを目指して, 令和2年7月1日に創設されました。創設初年度は, 組織の認知度を高めることを中心に活動をして参りましたが, (一財) 土木研究センター様など関連機関のご協力もあって, 幸先の良いスタートが切れました。次年度に向けては, 会員増加につながるような, 既成の組織では出来なかった独自の活動を続け, 会員のみなさのご期待にお応えして参りますので, 皆様のご理解とご協力を切にお願いする次第です。

【部門活動報告】

≪事業部≫

① 廃棄物処分場災害強化復旧設計業務

LRRI 発足前の令和2年5月に, 賛助会員の要請で, 同じく複数の賛助会員の支援で, 茨城県内の廃棄物処分施設強化復旧業務の設計を担当し, 令和3年3月31日に終了いたしました。

② 「岐阜県における太陽光発電所事業に関わる盛土の安定性に関する意見書」作成サポート業務

令和3年3月, 県内のコンサルタント様のご依頼で, 標記の「意見書を茨城大学として提出してもらえないか?」という要請がありました。それを踏まえて, LRRI もサポートする受託業務という了解のもとに, 4月末に送られてきた調査報告書に対して, 安原代表理事を中心に, 岸田副代表理事と伴理事のサポートを得て5月12日に意見書を提出し受理されました。なお, 本意見書の内容は, “送られてきた地質報告書が現地の状況把握を目的とした事前調査として実施された結果を報告していること” を前提に執筆されました。

③ 「なんでも住宅相談室」開設

住宅と住宅基礎に関する相談を受けつけております。相談内容によって, 費用は異なります。相談内容の一例を, ホームページに「土地編」, 「住宅編」, 「その他」に分けて, Q&A形式でまとめています。まずは, メールフォームでご相談ください。

④ 「T市地域国土強靱化コンソーシアム」設立の検討(次年度へ向け検討継続中)

賛助会員からの相談を受け, 標記の件につき, 同会員の協力のもとに, 同市企画部とLRRIの間で検討を進めています。次年度以降の業務に繋がるかもしれません。

≪技術開発・展開部≫

① 「気候変動対応技術&ビジネス研究会」

令和2年11月2日, 「気候変動対応技術/ビジネス研究会」キックオフセミナーを開催しました。国立環境研究所の岡和孝主任研究員による基調講演の他, 民間企業の気候変動緩和技術・対応技術が報告され, 気候変動ビジネスの可能性と将来性について活発な討議がなされました。また, 「気候変動緩和・適応技術&ビジネス研究会に関するアンケート」の結果, 気候変動に関連したビジネスへの関心の高さが把握できました。一方で気候変動緩和・適応技術をビジネスに結び付けることは一筋縄とはいかないことも垣間見えました。当研究会は会員相互の気候変動緩和・適応技術とビジネスに関する情報交換と研鑽の場となり, さらに新しい技術の提案に繋がるよう展開したいと考えています。

② 「インフラリハビリ研究会（IRT 研究会）」

気候変動や大規模地震という外力に対して、インフラは老朽化していく社会の脆弱性の高まりにレジリエンスとなる具体的な強靱策の選択，研究，推進を目的に研究会を設立しました。茨城大学で既に研究の進んでいた橋梁の強靱化工法，フォームサポート工法を世に出し啓発活動をするため研究会内にフォームサポート（FS）工法分科会を発足（2021年1月）し，インフラ補修，維持，更新工法を有するメーカー（JSP，岡三リビック，アキレス，昭和コンクリート工業）が現在の分科会メンバーとなっています。2020年2月に『インフラリハビリ技術』と題して，地域国土強靱化研究所名で各メンバーが有する工法紹介冊子を製作しました。

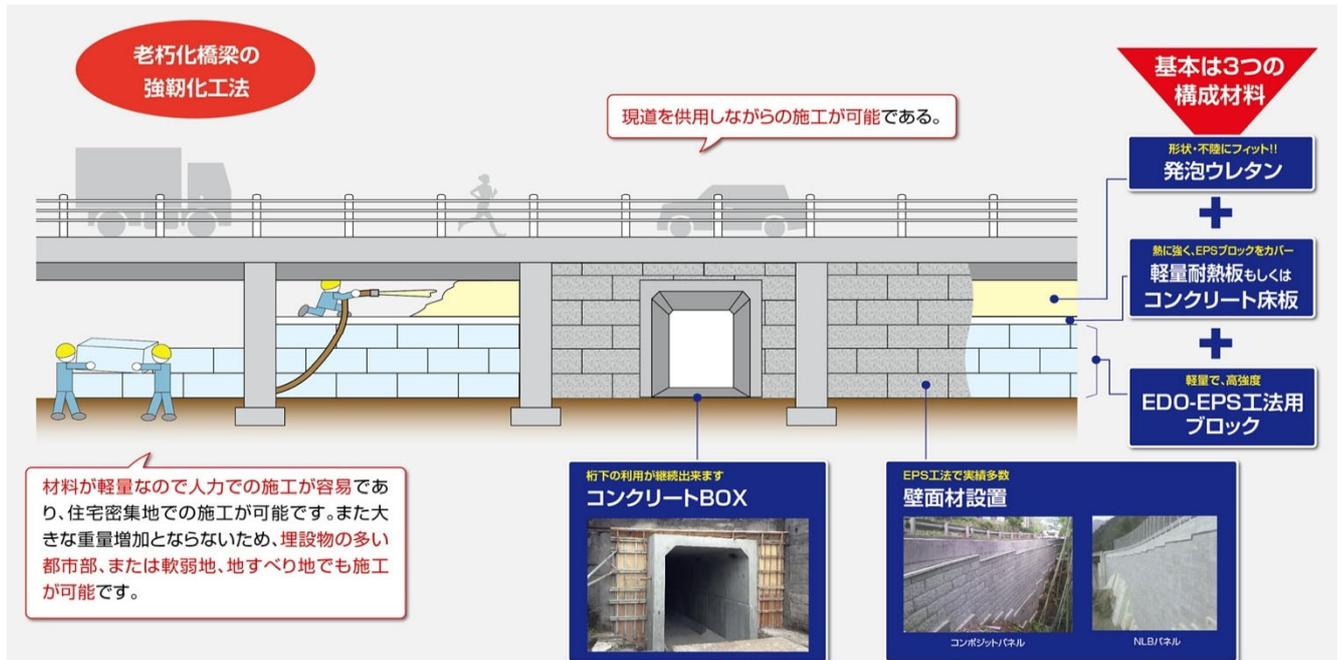


図1 フォームサポート工法（橋梁の盛土化）概要図

③ 「ICRTによる共生社会実現研究会」

自助・共助・公助を基本とする，地域防災・減災活動の考え方を先行的に整理し，高齢者・障害者・外国人等の多様性を考慮した，「災害情報プラットフォーム」を基盤とする地域DX連携事業を提示，活動準備に着手した。併せて，会員企業の所有技術を収集しました。また，i-Construction推進コンソーシアムに加入し，技術動向調査を進めるとともに，今後各会員企業の要望，ヒアリングを実施し，研究会の立ち上げ，組織化を目指します。なお研究会発足の参考資料「LRRRIにおけるICR」として，関連技術を集約しPPTを作成しました。

④ 「合理的な液状化対策工法新展開研究会」

1) 砕石利用地盤改良・補強研究会の発足に向けて

砕石を利用した地盤改良はグラベルドレーンやグラベルコンパクション等が広く認められています。近年，LRRRI会員企業と茨城大学の共同でジオシンセティックスと組み合わせて水平敷設する等，地盤改良と地盤補強を融合させる技術が提案されています（図2を参照ください）。今後，このような技術の連携や融合の可能性，近年の自然災害の巨大化に対応できる技術の開発の可能性を探るための研究会の発足を準備しています。

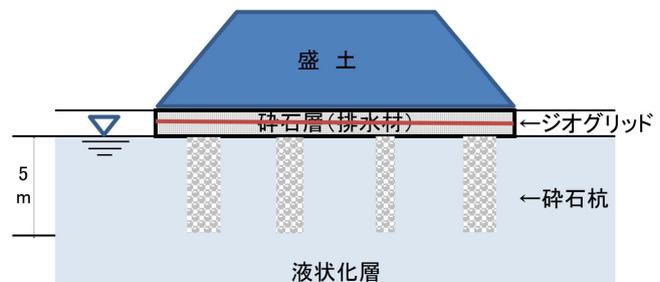


図2 砕石利用地盤改良&補強工法の概要図

今後，このような技術の連携や融合の可能性，近年の自然災害の巨大化に対応できる技術の開発の可能性を探るための研究会の発足を準備しています。

2) 合理的な液状化対策工法研究会に向けて

東日本大震災後の多くの学協会の調査研究を通じて、「防災」から「減災」へのコンセプトが確認されました。液状化対策でも、発生防止工法から被害を受けない工法へ関心が向けられています。大地震では一部液状化を許容しても現実的な対応を図ろうとするものであり、既往構造物など施工上及び経済面の制約を考慮すれば、こうした“合理的な工法”が求められていることが分かります。さらに、地域の広がりや長期に亘る見通しなどを考慮した合理的な対策を指向する必要があります。一方、一部液状化した際の地盤挙動を設計に反映するためには、高度な解析技術が必須となります。こうした難しい技術課題をどのように解決して行くか、さらに、どのようにビジネスに結び付けるかを、関係する大学・研究機関の指導を受けつつ会員間で検討する“場”を設けるべく、準備を進めていきます。会員からの忌憚のないご意見をお寄せください。

《教育支援部》

① (一財) 土木研究センターと連携して技術者講座「災害に気づき・学び・活かす」



2021年5月19日、6月2日の両日、“ハイブリッド形式”で技術者講座「災害に気づき・学び・活かす」(2回シリーズ)を開催し、「道路盛土の性能、津波に対する盛土の粘り強さ、河川堤防、落石と対策、土石流と対策、地震断層と対策」の6つの話題について土木研究センター常田賢一理事長が、合計9時間に亘って熱の籠もった講演をされました。貴重な技術資料と知見に接することができました。今後も、土木研究センターと連携を深めていきたいと期待します。なお、本講座のテキストは期間限定(6月18日(金)から7月17日(土))で会員に公開されました。

② NPO ブルーアース主催E&E・防災セミナー

(地盤品質判定士会神奈川支部共同主催)

2020年10月15日～11月12日に開かれた「エネルギー&エコロジー・防災セミナー第17回『気候変動と地盤防災を横浜から考える』(5回シリーズ)に、エルリから3名(安原、岸田、足立)が参加しました。冒頭、安原代表理事が「地球環境変化が地盤防災にあたえる影響を考える」の題で基調講演を行い、大好評でした。その他、「過去の災害に学ぶ地盤の品質、県民センターの立地と横浜の浸水危険度、横浜宣言の提案(岸田副代表理事)」、「建設産業が取り組む地盤防災・減災テーマ(足立会員)」について、エルリのメンバーが講義・話題提供を担当しました。第4回に安原代表理事がオンラインでされた話題提供「防災・減災と地域連携を考えるー“ワガコト化”するにはどうすれば良いか?」は大きな反響がありました。成果は“地盤災害に対するよこはま宣言”にまとめられ、主催の2団体から公表されました。今後、環境や防災の問題に関してNPOと交流を諮りたいと考えています。

③ 地盤品質判定士会神奈川支部総会(代表理事話題提供、岸田・足立参加)

2021年4月18日、横浜で地盤品質判定士会神奈川支部総会が開かれ、続いて行われた講演会に、安原代表理事が「気候変動と地盤災害に関する『ワガコト化』と題して話題提供を行いました。上記のE&E・防災セミナーでの安原代表理事の話題提供を受けて、主催者から特にこの話題をリクエストされました。今後、地盤の技術課題や地盤品質判定技術に関して主催支部と連携・交流を諮りたいと考えています。

④ 資格取得支援講座

本 LRRi (エルリ) には、豊かな知見と経験を有する多くの技術者が参加しています。一方、年齢を問わず生涯教育・継続教育が求められています。会員企業に勤務される社員や個人会員の中に、技術士、地盤品質判定士などの資格試験合格を目指す方も少なくありません。しかし、その多くの方が日常業務に忙しく試験準備もままなりません。そこで、受験者や会員企業の状況に合わせて、エルリの資格既得者が、双方向コミュニケーションを通じてオーダーメイドの試験対策を立案します。そして、定期的な対面またはオンライン面談を通じて、進捗の確認と疑問点の解消を図ります。本年度は準備作業として、中核的チューターを担う方の理解を得ると共に、エルリ会員を対象とした「教育支援部のアンケート」を5月末に配信しました。

上記の「アンケート結果」を集約して、資格取得支援活動をできるところから着手して、その状況をエルリ会員が共有します。資格取得を目指す方の技術力向上を支援すると共に、チューターの方の技術伝承と継続教育を支えます。

⑤ なんでも住宅相談室の構想

「住居の購入を行うため、土地やハウスメーカー選びをしていた際に、不安に感じていた事柄や数々の疑問に関して『(エルリ) なんでも住宅相談室(当時、準備室)』に相談したところ、大変丁寧にご対応頂いた。結果として、無事住居の購入を決断することができた」との市民の声を受けて、「なんでも住宅相談室」を教育支援部の活動の1つの柱に位置付けました。購入者が疑問に思うであろう質問を集約し、それらへの回答例をエルリのウェブサイトに掲載しました。加えて、複数のハウスメーカーに対して、この活動内容を紹介して、併せて、エルリの活動をPRしました。

住宅と住宅基礎に関する相談を、会員・非会員を問わず、受け付けています(現地踏査など対応内容によって、費用が必要な場合もあります)。相談内容の一例を、「土地編」、「住宅編」、「その他」に分けて、Q&A形式でエルリHPまとめていますので、ご覧ください。住居の購入を検討している一般の方に対して活動を広く周知していくことで、より多くの質問を寄せていただき、個別に対応します。また、ハウスメーカーや地域の工務店などと連携を図ることで、購入者にとってより安心のできる住宅選びの環境を整備します。

⑥ エルリの活動を通じての継続教育の促進(CPDポイントの付与)

地盤工学会、土木学会、建設コンサルタント協会、全国地質業協会などの協力を受けて、エルリが主催する講演会、講習会などに参加した場合には、建設系 CPD ポイントを付与して、会員の継続教育が促進するよう支援しています。

【記念イベント】

《設立記念講演会の報告》

コロナ禍の中、茨城県産業会館において、令和2年8月24日に、(一財)土木研究センター・常田賢一理事長(大阪大学名誉教授)による「技術開発の動機付けと展開-災害の示唆と技術基準類-」と題するご講演を戴きました。好評だったこともあり、既述の令和3年の技術者講座「災害に気づき・学び・活かす」に繋げることができました。



写真2 設立記念講演会の会場の様子

《令和3年度 LRRi 総会のお知らせ》

令和3年8月25日13:15から茨城県産業会館でLRRi総会が開催されます。総会后14:20から(公財)地球環境産業技術研究機構の秋元博士のご講演も予定しています。詳細は事務局から連絡申し上げます。

《設立1周年記念フォーラムのお知らせ》



エルリは、昨年2020年7月に、一般社団法人として茨城の地に創設されました。この1年間は新型コロナウイルスの大流行を受けて大きな混乱がありましたが、エルリの活動は会員・役員の努力によって着実に展開されました。この1年間の省みると共に、今後の発展を期して、2021年7月3日（土）に「創設一周年記念フォーラム」を、”ハイブリッド形式“（会場とオンラインの併用）で開催されます。講師に高名な安田進 東京電機大学名誉教授をオンラインでお招きして、「液状化対策技術の現状と課題と展望」の題で記念講演をしていただきます。大規模地震が起こった現場をヘリコプターから被害

状況を解説される安田先生のお姿をご記憶されておられる会員の方も少なくないはずです。同じ標題で「基礎工2021年5月号」に掲載された報文から講演内容を考えますと、液状化の発生を防止する工法から被害を受けない工法へのトレンドや、既設構造物・地区全体への液状化対策工法など、これまでの地震における液状化被害と復旧対応実績を踏まえた最新知見を伺えるものと予想しています。エルリ会員にとって、技術面・業務面で大変役立つものと期待されます。フォーラムでは、「私の一番大切なこと」の題で、役員による話題提供があり、参加の方全員による1分スピーチを予定しています。詳しくは、エルリのHPをご覧ください、皆さまのご参加をお待ちしています。

【事務局便り】

本法人会員みなさまへのサービス提供および会員間の交流を図ると共に、地域社会、各種業界へ寄与、情報発信を進めるため下記取り組みを進めています。

《本法人ホームページの開設と更新管理》

構成を①LRRIとは ②業務内容 ③会員専用 ④入会案内 ⑤役員だより ⑥お問合せ（住宅相談）としています。また、併せて新着情報（ニュース・イベント）をホーム中央に配置するとともに、連絡先、会員リスト、関連リンクを下段に配置し、アクセスし易いものとししました。特に、会員専用ページにより、各研究会情報、会員相互の情報交換の場としています。なお、将来的には、英文のホームページも作成予定です。ご期待ください。

※URL：<https://lrri.or.jp> 参照

《メルマガによる情報発信》

プル型のHPによる情報発信に加えて、メルマガによるプッシュ型情報発信を「お知らせ」として2021.2より開始しました。メルマガは、「会員だより」と「LRRIニュース」に分かれており、「会員だより」は会員専用ページに、「LRRIニュース」はホームページの表紙部分に掲載されています。

また、月に一度の「役員だより」も掲載しておりますので、お目通しください。

《事務局体制の充実》

会員サービスの利便性向上のため、広報（HP、メルマガ等）、総務（セミナー事務、会計事務等）業務の整理、一元化に取り組んでいる。本法人活動におけるご要望、ご依頼、ご意見等お寄せ下さい。

※ 窓口 staff@lrri.or.jp

【今後の展望】

≪安原代表理事≫

社是である“前義後利を以って共助と自他共栄”を念頭において、新年度のキャッチフレーズとしては、“技術と技術，組織と組織をつないで，新たなソリューションを見出すこと”を謳い，これを LRRRI の具体的なスローガンとします。これを以って，①各部門業務の推進によるレジリエンスの高い，共生型地域社会創成への貢献，②他に比肩できない分野融合型技術の創成による LRRRI の独自性の露出化・差別化，③以上を以って地域社会の強靱化に貢献することを目指します。

≪岸田副代表理事≫

現在，コロナ禍にあり，少子高齢化が進む我が国では財政的に難しい課題ですが，本社の名称にも入っている「地域国土強靱化」に取組み，前進させたいと思います。防災性能の高い土地は，安心・安全な生活の基盤です。それを実現するためには，長期的なビジョンに立って継続的に改善を，足元から将来へ，地域から全国さらに地球全体へ図ることが求められていると思います。そして，何よりも大事なことは，市民・人類の英知の集結と目標と計画の共有です。エルリがその一翼を担うことを目指します。

≪須田副代表理事≫

地域、現場に根差した活動を進めるとともに、With コロナ、After コロナ社会における新しい社会、生活様式を目指した社会変革、産業変革を進めます。また、SDGs の考え方に基づく、ライフサイクル、多様性等を念頭においたハード技術とソフト技術の融合による総合的システム、技術の開発、普及を考えたいと思います。

【役員の顔ぶれ】



安原代表理事



岸田副代表理事



須田副代表理事



岡本理事



小浪理事



田中理事



伴理事



丸山監事



霜越監事

【特別賛助会員紹介】

(株)JSP 〒100-0005 東京都千代田区丸の内 3-4-2 (新日石ビル) 03-6212-6362

<https://www.co-jsp.co.jp/>

【賛助会員紹介】

アキレス(株) <https://www.achilles.jp/>

地水開発(株) <https://chisui-kaihatsu.co.jp/>

イーテック(株) <http://www.earth-techno.co.jp/>

東京インキ(株) <https://www.tokyoink.co.jp/>

岡三リビング(株) <https://www.okasanlivic.co.jp/>

みらい建設工業(株) <https://www.mirai-const.co.jp/>

(株)高萩エンジニアリング <http://www.t-hagi.co.jp/>

メトリー技術研究所(株) <http://www.metry.jp/>



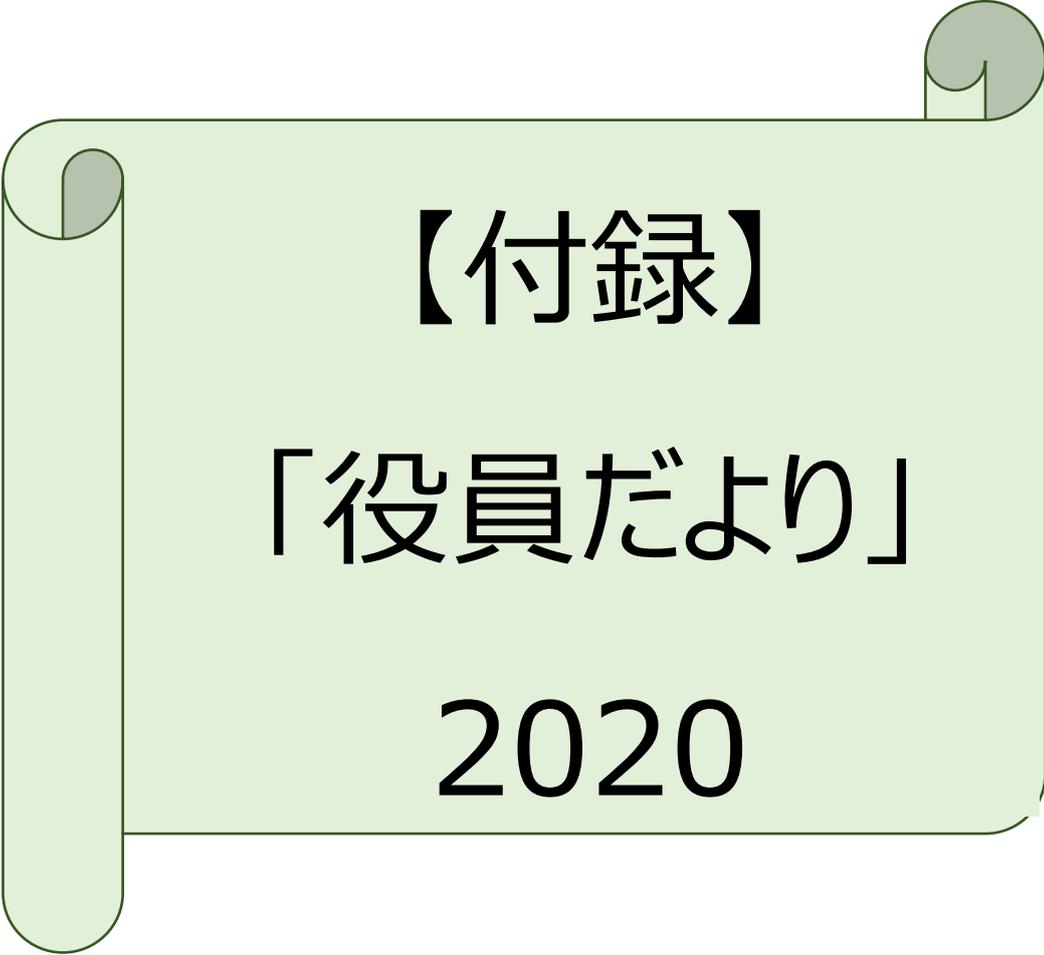
一般社団法人 地域国土強靱化研究所

ホームページ <https://lrri.or.jp>

〒311-0105 茨城県那珂市菅谷 4527

お問い合わせ staff@lrri.or.jp





【付録】

「役員だより」

2020

「役員だより」（令和2年10月号）

「下山の途中」

茨城大学を退職する2010年3月に最終講義をさせて戴きました。その時に、人生には3つ山があり、65歳から85歳が最後の3つ目の山、とお話しました。後期高齢者になった今、3つ目の山を下ろうとしています。そのこともあってか、法人を立ち上げたときに、何人かの方に「いまさら何をやるんですか？」と問われました。当然の疑問と思います。

大学を退職する直前の工学部での送別会の折に、「やりたいことはすべてやりつくしました。思い残すことはありません」と言い放っているながら、いまだに大学のオフィス（場所は、日立から水戸へ移りました）にしがみついている姿はきっと奇異に見えることでしょう。ですから、新たに一般社団法人を設立した、と聞いたら、“気でも違ったのではないか？”と不審に思われた（ている？）のは当然かもしれません。理由はいくつかあるのですが、もっともらしい言い訳をしますと、次のようです。

五木寛之氏は、「下山の思想」（幻冬舎新書）のなかで、山に上るときよりは、下るときの方が周りによく見える、という意味のことを書かれています。

新しい法人のほとんどの役員や会員の方々はまだ上り坂です。ですから、上りで見えるものと下りで見えるものがどう違うのか、を会員の皆様との議論を通じて確認するのは大変楽しみなことです。

適切な例にならないかもしれませんが、例えば、地球環境分野では、“レジリエンス”という言葉が大事なキーワードの一つです。しかし、分野によってこのレジリエンスの定義が異なる、という課題があります。工学の分野の防災・減災の技術が生態系の維持の方法と等価ではないことがある、などはその典型です。Under CORONA, with CORONA の時代になって、事態は一層複雑になり、レジリエンス強化の大きな妨げになっています。思いがけない事態ですが、人類は有史以来あらゆる困難を克服してきました。英知を結集してきつと困難な事態を克服することができるでしょう。当法人も「気候変動対応技術&ビジネス研究会」の中で、このことに果敢にチャレンジして、今までにない新しいビジネスを作って参ります。

法人設立を考えているときに、リンダ・グラットン&アンドリュー・スコット著（池村千秋訳）「ライフシフト～100年時代の人生戦略～」（東洋経済新報社）を読みました。大変示唆に富む内容で勇気づけられました。ただその時は、COVID-19 などという予期せぬ出来事は、当然のことながら、想定されていませんでした。社会的な安全と安心を確保することが個々人のそれに繋がることを信じて、法人の運営を進めて社会的な信用と信頼を勝ち得ていきたいと思っています。

“誰かいる カサコソと鳴る 枯れ落ち葉
ふと知らされる 月改まる”

代表理事・安原一哉

「役員だより」 令和 2 年 11 月号

「原点」

法人案内の中に、「“経験と知識を有し、人間性豊かなシニア”を中心に、ミドルやジュニアともしなやかに連携できる集団による社会貢献型組織です。」と書いています。なんとなく胡散臭い、という声も無きにしも非ずです。“人間性豊かなシニアを中心に社会貢献を目指す”などを見たらそう思われるのは当然でしょう。しかし、そういうからには、きちんとした信念が必要です。

前号同様に、また、昔話になりますが、母校の助手をしてその後私立大学に移ってしばらくしたあるとき、いろいろなことが思い通りにならないので指導教官だった Y 教授に愚痴を言ったことがあります。その時に言われたことが生涯を決めるメッセージになりました。いわく、「君は考え方を間違えている。自分の人生は自分で全て決められる、と思っているようだが、それは間違いだ。むしろ、“自分の人生は人が決めてくれる”と思った方がいい。では、君は何をどうすればいいか？といえ、ば、“他人のために何ができるか”を中心に考えて生きていくべきだ。そうすれば、自然に君のことは君を見ている他の人が決めてくれるのだ。そういう風に考えたまえ。」

以来、ことあるごとに思い起こし若い方々に紹介をさせていただいていますが、定年前のあるとき、稲盛和夫著「生き方」（サイマーク出版、2004）に“利他の精神”というのが仏教にあって氏はこれを生き方の基本にしている、という意味のことを書かれているのを読みました。わが意を得たり、と思ったのですが、書籍のレビュー欄を見ますと、「時代錯誤の古い経営者の考え方で、禁書にすべきだ」という極論もあるのには驚きました。一方で、デジタル中心の社会であろうとアナログ中心の社会であろうと、人間の生き方の原点は変わるものではなく、このような批判（時代錯誤の古い経営者の考え方だ）にはアナログ人間には受け入れられない、という真逆のコメントもありました。

私は、数学はあまり得意ではありませんので、詳しいことはわからないのですが、原点そのものは、企業であれ、大学であれ、簡単には変わるものではない、と思っています。ですから、新型コロナウイルスと共存していく社会が長く続くとしても、本法人は社会貢献型の組織で、“先義後利”の社是は、“揺るぎない原点”として動かさないものと思っています。

“思いがけぬ new normal のせいゆえか

ゆめの
夢野を巡る 孫たちの声”

代表理事・安原一哉
(2020 年 11 月 13 日)

「役員だより」 2020 年 12 月号

「歓喜の歌」

今年はそれほどでもないのですが、12 月になるとどこからともなく、クリスマスソングが流れてきて、にわかには気ぜわしくなります。併せて、ベートーベンの“交響曲第 9 番合唱付き”もテレビやラジオで聞かれるようになります。カラヤンが振ろうと小澤征爾が振ろうとその違いはよく分からないのですが、ビング・クロスビー、マライヤ・キャリーや山下達郎のどのクリスマスソングより、1 年の終わりを締めくくるのには適しているように思えます。欧米では特別な機会に『第九』を演奏することはあるものの、年末だからとあらゆるオーケストラが演奏するものではなく、年末の風物詩となっているのは、わが国だけの現象のようです。ただ、それもなぜか私にはわかりません。今までは、「みんなが聞いているから何となく」というのが正直なところでした。

最近知ったのですが、第 4 楽章の「歓喜に寄せて（歓喜の歌）」（*An die Freude* 1785 年初稿、1803 年一部改稿）の歌詞は、ドイツの有名な詩人（思想家とも言われる）シラーの詩作品「自由賛歌」（*Ode An die Freiheit* 1785 年）を一部書き直して作成したものだということを NHK のテレビ番組であるピアニストが解説していました。興味深かったので、ネットでシラーの原詩を調べてみましたが、「Alle Menschen werden Brüder（すべての人々が兄弟となる）」という一節があり、解説によると実はこれが第九の最も大事なところだということでした。18 世紀前後のヨーロッパですから、当時は危険思想と思われていた、“上も下もないみんな自由で平等、みんな結束しよう”という思いが込められているとのこと。そういう意味では、逆に、今のこの時期の年末に聞いて越し方を振り返るのには最適な音楽ではないかという気がします。

これを書いているうち、英国人の友人が昔、BBC オーケストラ演奏のベートーベンの交響曲の 1 番から 9 番までの交響曲全部を CD に入れてくれたのをふと思い出して、文字通り久しぶりに聞いてみました。どれも抵抗なくすっきり聞けましたが、これを機会に、九番だけはカラヤン、小澤征爾やフルトベングラーなどの演奏と比べてみるのも一興ではないかと思いつきました。芸術にはそのような楽しみ方があります。読書においても同じで、例えば、ハードボイルドの騎手であるレイモンド・チャンドラーの名著“*The Long Goodbye*”は、かつて、清水俊二の名訳（長いお別れ、1976）があったのですが、村上春樹が訳したもの（*ロンググッバイ*、2007）が現われるに及んで原作の面白さが一段と際立つことになりました。読み比べ見るとそれはよくわかります。比べてみる、これも翻訳物の楽しみ方の一つであることを発見できます。

これらはほんの一例で、“ことほど左様に”人生には楽しいことが多すぎて、どれもこれも堪能するには人生 100 年では短すぎる、というのが昨今の私の強い思いです。

“彼も逝き あいつも逝きて 残りしか
われはわれにて わが道を行く”

代表理事・安原一哉

「役員だより」 2021 年 2 月号

「想定外はなぜ起きるのか？」

私事になって誠に恐縮ですが、1 月 10 日の朝、急な呼吸困難に襲われ、救急車で市民病院に搬送されました。医師の適切な手当てで、幸い、12 日間の入院後退院し、2 月 1 日現在、自宅療養中です。持病を持っているのに思いもかけない事態となったのは、偏に、“過信”と“油断”でした。

同じような内容のことを別の場面でも使っていたな？と思いながら振り返ってみますと、昨年（令和 2 年）の 75th 土木学会年次講演会（9 月に名工大で開かれる予定だった）において表題の“想定外はなぜ起きるのか？”について研究発表する予定だった時の PPT を見直してみますと、“かつて経験したことのないような災害”が起きるのは、“過信”とそれに由来する“油断”によるところが大きい、というのがありました。併せて、異論もあることともいますが、“想定外”という言葉をやたらに使うべきではない、と主張させて戴きました。ついでに、想定外を避けるための考え方として、“事後対応から事前対応（予防保全）へ”ということも強調させて戴きました。ただ、これを成功させるためには、コスト・ベネフィット分析が不可欠です。

話が飛躍したついでに、かなり無理やりですが、日頃考えていたことにつなげてみたいと思います。話は、“ワガコト化”です。過去、環境省の戦略研究 S4 & S8 に関わっていたころ、ある成果報告会の折に、環境ジャーナリストの枝廣淳子氏が地球環境問題の大事なことの一つは、どう、“ワガコト化”するか？というところにある、という意味のことを言われたことがあります。グローバルな視点で考えて大事なことを第一人称で語る、あるいは、行動することをワガコト化する、と呼んでいるようです。このことは、実は、言うのはやさしいのですが、実行するのは結構困難を伴います。

このことは、病気にも自然災害にも共通していて、他人の災いを“自分のこととして考える”ということ、自分自身がそういう事態に遭遇して初めてできることだと実感出来るものではないか？という思いに至りました。ただ、もちろん、それだけでは寂しいことですから、2020 年 10 月の「代表理事だより」にも書きましたように、“利他の精神”をどう涵養していくかが今こそ問われているという思いに駆られます。

“窓越しに 春の息吹が 訪える

枯れ木に小鳥 佇んでおり”

代表理事・安原一哉
(2012 年 2 月 1 日)

「見えぬけれどもあるんだよ」

昨年 10 月～11 月に、NPO ブルーアースと地盤品質判定士会神奈川支部の共同主催で、「地球環境変化と地盤防災・減災を横浜から考える」のテーマで、対面とオンラインの“ハイブリッド形式”の 5 回に亘るセミナーが開催されました。冒頭の基調講演を当社団の 安原一哉代表理事にお願いしました。私も担当幹事として運営・講義に参加できました。

地盤品質判定士の方々による講義も、ハザードマップの見方や宅地の災害危険度評価など身近で興味深いものでしたが、最も印象に残ったのは講義に先立って行われた崖地の野外巡検でした。現地は我が国で初めて「行政代執行」が行われた斜面でした。私が住む横浜市の斜面災害リスクが高いことは、講義で教えられていましたが、斜面の迫力は強烈でした。併せて、巡検途中の公園から遠望した下末吉台地のでき方や形成年代の説明に興味をそそられました。未だ地殻変動が進行していることに、初めて気付かされました。

工学の視点で地盤を学び、実務に従事して来ましたが、地盤を理解する上では理学の地質学の知識が必須であることに、思い当たりました。

数年前、地盤工学を学ぶ導入として、東京スカイツリーの地中の基礎形状や、海上石油掘削リグのピア・檣の高さ（東京スカイツリーがすっぽり入る深さに立っている）を題材に「大切なものは目に見えない」ことを講義して、学生と共に学んで来ました。ガイダンス授業の趣旨は、目に見えないインフラストラクチャーが私たちの生活を支えていて、その建設やメンテナンスに卒業後に携わることに学生が誇りを持ってもらうことでした。

授業では、湯川秀樹の随筆「目に見えないもの」を推薦して読書を勧め、サン・テクジュペリの「星の王子さま」から「肝心なことは、目に見えない」を紹介して、関心を高めてもらうことを狙いました。目に見えない程小さい原子・素粒子の世界から、遠すぎて見えない深宇宙のことまでが、私たちの生活と結び付いていることを実感できれば、人生の意味を新たに思いだせると思います。

上記の巡検以降、歴史に興味を湧き、地質年表や「137 億年の物語－宇宙が始まってから今日までの歴史－」（文藝春秋社）などを読みながら、過去から未来に向けての時間軸が目に見えない最重要項目であり、かつ、大切な視座を与えてくれると考えています。

詩人金子みすゞに「風とたんぽぽ」という詩があり、“昼のお星はめにみえぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。”の一節が浮かんで来ます。地域・国土・地球の空間的な広がりに加えて、本社の活動では時間の連続性にも気を配りたいものです。

「副代表理事」・岸田 隆夫
(2012 年 3 月 14 日)

役員だより 2021年5月号

「雑草考」

コロナ禍もあって自宅にいる時間が一層増えてきました。運動不足の解消と医師の指示によるリハビリもかねて、朝夕と散歩の機会が増えてきました。歩いているうちに気が付いたことの一つは、“土木屋”のくせに、恥ずかしながら、路上の樹木やろばたに繁茂する雑草は、クズ（葛、以下、“クズ”と称することにします）を除きますと、ほとんど名前が出てこないことです。

さて、クズにつきましては、少し経緯があります。数年前まで、NEXCO 東日本(株)と茨城大学（のちに、筑波大学も参加）の間で開催されました情報交換のための「茨城地域技術懇談会」の会長を9年間勤めました（現在は、茨城大学・小柳武和・名誉教授が会長）。辞任後の2017年のある時、NEXCO 東日本・水戸工事事務所・鈴木雄吾所長（当時、現・技術本部技術環境部環境課長）から連絡があり、「高速道路の運転安全性や環境維持の立場からクズに困っているが、対処法についてなにかいい知恵はないか？」という相談がありました。筆者は植物につきましては、前述のように、ほとんど素人同然でしたので、当時勤務していました茨城大学地球変動適応科学研究機関（ICAS、現在は、地球・地域環境共創機構（GLEC）と名称変更）の教員スタッフに、「関心のある方はおられますか？」と電子メールで尋ねました。すると、すぐに、理学部の及川真平准教授からメールがあり、研究室にこられて、当時研究室をシェアしていました堅田元喜講師も加わってお話をしました。あとでわかったことですが、及川准教授はそのときは、“クズはむつかしいので、そんな要請は断った方がいい”と助言しようと思っていたとのことでした。ところが、豈図らんや、堅田講師のサポートを条件に、「やってみますか」ということになってしまいました。

そこから、若手の教員を中心に学部（理学部、農学部、工学部）や分野（植物生態学、土壌学、景観工学、地盤工学）をまたがった、(株)NEXCO 東日本と茨城大学の間での共同研究プロジェクトが始まり、今日に至っていますが、仕掛け人の筆者は、「頑張っ！新しい学問領域を作っ！」とか、「そもそもこの地球上に無用な生き物とか存在するの？」などと、愚にもつかない、無責任なことを求めたり、問いかけをする傍観者になっています。

本件には、実は、おまげが付いてきて、(株)NEXCO 東日本から、理工学大学院博士後期課程への進学希望者出てこられて、現在研究に着手されています。指導教員は、前述の理学部・及川真平准教授（専門は、植物生態学）です。このプロジェクトと社会人ドクターの研究を通じて、「グリーンインフラとグレーインフラの融合」の事例に繋がらないか、と筆者はひそかに、期待をしているところです。

なお、及川准教授の語る“クズのお話”は、LRRIにとって傾聴に値する内容ですので、一度、お聞きする機会を持ちたいと思っています。乞うご期待！

ひそやかに 茂みの中に 咲きたるぞ

雑草とても 同じ生命

(代表理事 安原一哉)

今、想えば～価値観変化を考える～

(一社) 地域国土強靱化研究所に参画して、一年が経った。安原代表理事の思いを知ってか、知らずか、勝手に誘われるように仕向けていたのかもしれない。シニアが頑張れる時代、60 歳定年から 65 歳定年と変わり、小生は 65 歳を過ぎた今、何かしらでも自分にできることがあれば、働きたいと考えるようになった。以前は悠々自適な生活を過ごすことが、理想だったのかもしれない。その裏には、働くことが愉しいと思える価値観変化がある。趣味や好きなことが伸ばせれば、一躍有名人となり、仕事化となる。働くことが、時間を売るといった価値観は変わった。旧態以前たる価値観に囚われると、生きづらくなる時代となった。

若い頃、自分の家を持つことが夢だった。それが今、少子高齢化ということで、親世代の家を受け継ぐことの負担、自分の家の処分を子供に託す負担感が時に頭をよぎる。自動車は希少かつ高級であった子供時代、その結果マイカーという夢を手に入れられるようになった。最近では、トヨタ自動車の「KINTO」サービスに代表される「サブスクリプション」なるものが始まった。民泊、ライドシェアリングに代表される「シェアリングエコミー」となると、なかなかついていくことが難しくなる。ただ、私の専門である、データ連携、データ流通を考えるとマッチングサービスとしてのプラットフォームビジネスが急伸びしてきている。「メルカリ」然り、複数のターゲットを結びつけるという、自分自身では何も造らず、関係性を創ることになる。以前は金融機関が融資という手段により、専門家として複数のターゲットを結びつけてきた。これが、情報をオープンにし、オンライン化することにより一般市民という非専門家でも参加できる市場を提供可能とした。また、インターネット利用から始まった「ベストエフォート」なる考え方も一般的になった。言い方を変えれば、最大限努力はするが、エラーもあることを前提としたサービス提供の考え方である。

これまでの日本的技術の考え方からすると、まずは品質ありきである。また、私的所有が前提であった。品質とコストのバランス、社会的所有という考え方、価値観に馴染まねばならないと思うと同時にシニア技術者として今までの価値観を知っているからこそ、逆転の発想、アイデア勝負ができるものと考えている。ただ、私達シニア技術者はこの価値観変化が適用されない分野も知っている。安全・安心、環境等に関わるものである。SDGs に代表される基本理念と価値観はこれまでの経済、社会の歴史的流れから帰結されたものとして、堅持していきたいと一人想いを馳せている。

副代表理事・須田 裕之
(2021 年 6 月 26 日)